



## 蜜柑（II）

それから幾分か過ぎた後であった。  
ふと何かにおびやか脅されたような心もちがして、思わずあたりを見まわすと、何時の間にか例の小娘が、向う側から席を私の隣へ移して、  
頻りに窓を開けようとしている。が、  
重い硝子戸は中々思うようにあがらないらしい。あの<sup>ひび</sup>皸だらけの頬は愈赤くなつて、時々鼻<sup>はな</sup>涕をすすりこむ音が、小さな息の切れる声

## 蜜柑（12）

と一緒に、せわしなく耳へはいつて来る。これは勿論私にも、幾分ながら同情を惹くに足るものには相違なかった。しかし汽車が今将まさにトンネル隧道の口へさしかかろうとしている事は、暮色の中に枯草ばかり明い両側の山腹が、間近く窓側に迫って来たのでも、すぐに合点のがてん行く事であった。にも関らずこの小娘は、わざわざしめてある窓の



## 蜜柑（13）

戸を下そうとする、——その理由が私には呑みこめなかった。いや、それが私には、単にこの小娘の気まぐれだとしか考えられなかった。だから私は腹の底に依然として険しい感情を蓄えながら、あの霜焼けの手が硝子戸を擡<sup>もた</sup>げようとして悪戦苦闘する容<sup>ようす</sup>子を、まるでそれが永久に成功しない事でも祈るような冷酷な眼で眺めていた。する

## 蜜柑（14）

と間もなく凄じい音をはためかせて、汽車が隧道へなだれこむと同時に、小娘の開けようとした硝子戸は、とうとうばたりと下へ落ちた。そうしてその四角な穴の中から、<sup>すす</sup>煤を溶したようなどす黒い空気が<sup>にわか</sup>俄にわかに息苦しい煙になって、<sup>もうもう</sup>濛々と車内へ<sup>みなぎ</sup>漲り出した。元来<sup>のど</sup>咽喉を害していた私は、<sup>ハンケチ</sup>手巾を顔に当てる暇さえなく、この煙を



## 蜜柑（15）

満面に浴びせられたおかげで、<sup>ほとんど</sup>殆息もつけない程咳きこまなければならなかった。が、小娘は私に頓着する気色も見えず、窓から外へ首をのばして、闇を吹く風に銀杏返しの鬢の毛を<sup>びん</sup>戦<sup>そよ</sup>がせながら、じっと汽車の進む方向を見やっている。

つづく

